

まちづくりの観点に立った産業や文化基盤としての自然環境の影響について

－ 入間・狭山の茶産業のブラタモリ的科学検証 －

(指導教員) 山田 和芳

1. はじめに

現代社会の複雑な課題に対応するには、地理的・社会的観点を含む学際的で課題探求型の学びが重要である。本研究は、地形や地質的視点の欠如が地域課題解決や持続可能な発展を妨げる現状を指摘し、NHK『ブラタモリ』に見られる地理学的手法を参考に、狭山茶産業を対象として地形や地質が産業形成に与える影響を科学的に検証する。これにより、地域特性を包括的に解明し、地形・地質的視点を活用した地域研究の新たな枠組みを提案することを目的とした。

2. 調査地域

本研究の調査地域は埼玉県入間市金子地区である。この地域は南部が平坦地、北部が丘陵地という地形的特徴を持ち、狭山茶産業の中心地となっている。また、金子台は武蔵野台地の最も古い地形面である K 面に位置し、地質学的にも長い地史を持つ重要な地域である。霞川沿いには住宅地が広がる一方、加治丘陵や狭山丘陵に囲まれた金子地区は、自然環境を活かした産業と生活が共存している。狭山茶の生産は、この地域の地形・地質的条件に密接に関連し、深い味わいの茶として日本三大茶の一つに数えられている。

3. 方法

現地調査、地形図・空中写真判読、文献調査を行った。現地調査では、茶畑や河川流域を巡り、地形特性や土地利用を観察した。地形図・空中写真判読では、断面図作成、地質図分析、土地利用分類図、地図や航空写真の年代比較を実施し、地形的要素と土地利用の変遷を分析した。さらに、文献調査により、狭山茶の歴史的背景や地域特性を補完し、地形や地質が産業形成に与える影響を多角的に検討した。

4. 結果

金子地区の地形と地質が、土地利用と狭山茶産業に大きく影響を与えていることが示された。地形図断面図の解析により、茶畑は標高 150m 付近の平坦な台地に集中し、宅地は低地や河川流域に分布していることが

確認された。また、地形分類図と地質図の分析では、茶畑が関東ローム層上に形成され、地質的条件が栽培に適しており、さらに、土地利用分類図や年代ごとの地図比較から、明治期に桑畑が広く分布していた地域が、昭和期以降に茶畑へと転換し、現在は都市化に伴い茶畑の減少が進んでいることが分かった。これらの結果は、自然条件と土地利用の変遷が狭山茶産業に与えた影響を示している。

5. 考察

金子地区の狭山茶産業が地形・地質的条件に深く根ざしていることが明らかとなった。金子台は関東ローム層と礫層が重なり、水捌けが良く、茶栽培に適した土壌環境があり、台地の高まりに茶畑が集中し、低地では水の確保が容易なため住宅地が広がっている。この分化は、自然環境を活用した土地利用の成果である。また、霞川や不老川周辺の低地では「ハケ」からの湧水によって河川ができ、宅地化が進んだ。土地利用の変遷も地形と社会経済的要因が影響している。明治期には養蚕業が主産業であったが、昭和期に茶産業への転換が進み、狭山茶が地域特産品としての地位を確立した。「台地の高まりが狭山茶に及ぼす影響とは？」という問いに対し、地形・地質的条件と社会経済的要因が相互に作用した結果が狭山茶の産業を支えたと結論づけられる。

6. 結論

本研究は、地域特性や産業形成において地形・地質的視点が不可欠であることを明らかにした。特に丘陵地帯の地質的条件が土地利用に大きく影響し、地域の文化や経済に深く関与している点を示した。また、「ブラタモリ的視点」を活用した地形や地質と人間活動の関連性の解明手法の有効性が確認され、地形図や地質図の分析に加え、街歩きを通じた実地観察の重要性も示唆された。地形・地質的視点は、現代社会の環境問題や地域課題への新たなアプローチとして活用でき、観光、教育、地域振興など多分野で応用が期待される。本研究は、地形・地質的視点の重要性と、それを活用した地域資源の価値向上の意義を再確認することが示された。